

派遣者番号	R4K14	氏名	片山 崇
研究主題 —副主題—	情意的側面の涵養を目指した国語科授業設計 —ICTを活用した書くことの指導を通して—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	中村 純子
所属	多摩市立青陵中学校	所属長	相楽 敏栄

キーワード：情意的側面 リライト ICT 字のない葉書

要旨：本研究では、情意的側面の涵養と書く力の育成に焦点を当て、その指導法についてリライト創作の活用とICTの活用を基に授業を構想し、有効な手立ての一端を明らかにすることを目的とした。視点を変えてリライトするという言語活動は、学習者の情意的側面を涵養するための有効な手立ての一つとなり得ること、リライト創作においては、文章を分析的に読み込み、人物理解を深めることが肝要であり、それらが情意の表出にも影響するということが分析を通じて顕在化した。また、書く力の育成においては、作家の技法を活用した創作の有効性を明らかにした。ICTの効果的活用においては、書くことの学習での指導法を検討したが、とりわけ、文章創作の最中にタブレットを活用して教師による支援を行うこと、そして、学習者同士が互いの文章を見合い、交流しながら記述ができるようにするという手立てを考案した。

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

現在、世界ではウクライナにおける戦争をはじめテロや紛争など、早急な対策が必要とされる深刻な問題が頻発している。グローバル化が急速に進む昨今においては、こうした社会問題を他人事ではなく、自分事として考えていくことが大切である。また、今後はますます社会が多様化し、複雑化していく中で、他者理解の精神や、互いを思いやる共感性といった情意が必要不可欠となる。これからの社会を生きる子供たちには、異なる社会や世界における問題を自分事として捉えさせながら、他者を思いやり共感するエンパシーといった情意的側面を涵養させていくことが最も必要とされる。OECD Education2030 では、こうした情意的な側面を「社会・情動的スキル」と規定している。白井（2020）は、この「社会・情動的スキル」の必要性を説き、社会の多様性が増大する中で、「他者への共感性とか、異なる文化に対する敬意とか、自己意識（self-awareness）といったスキルがより重要になってくる」と述べている。

また、東京都教育施策大綱においては、未来を生きる子どもたちの理想的な姿を、「他者への共感や思いやりを持つとともに、自己を確立し、多様な人々が共に生きる社会の実現に寄与する」ことができる人と掲げ、情意の育成が目指されている。

しかし、管見の限りでは、教育現場において情意的側面の涵養を目指した授業が意識的かつ意図的に行われているとは言い難い。そこで、本研究では、「情意的側面の涵養」に焦点を当て、その指導法についてリライト創作の活用と ICT の活用を基に授業を構想し、有効な手立ての一端を明らかにすることを目的とした。

2 研究の方法

(1) 理論研究

第一に、情意的な側面をどのように捉えるのかということを中心に、涵養していく手立てについて先行研究から見出した。第二に、文章をリライトするという学習活動の意義を先行研究から見出し、授業に組み込む手立てを検討した。第三に、国語科の授業における ICT の効果的な活用について、協働学習を行う場面と個別に書くことの場面の両面から検討した。

(2) 実践研究

理論研究を踏まえ、情意的側面の涵養と文章を書く力を育むことを目指した授業実践について構想した。そして、授業実践において、構想した指導方法がどのような可能性を導くのかということについて学習者の意識調査と成果物の分析を行った。分析については、2回に渡り実施したリライト創作の文章における情意の表出について測った。また、書く力については、作家の技法を文章創作に活用することの有効性について分析した。

3 研究の結果

(1) 理論研究

①情意的側面について

情意的側面については、段階を踏まえて涵養していくことが必要である。初めに、学習への興味や意欲を掻き立てるようなリアリティのある課題設定をし、言葉のもつ面白さに気付いたり、文章中の心情を読み取ったりしながら、豊かな言葉の感性を醸成していく。そうして自らの心で受け止め、感じたことを自らの言葉で表現するという過程を経て、言葉を大切にすることを育み、国語科として養われるべき情意を涵養していく。これらは、石井（2021）、益地（2002）らの論より示唆を得た。

②文章創作活動（リライト）とその指導について

視点を変えて文章をリライトするという言語活動は「第三の書く」とも示され（青木（1986））、没入して読みを深めることと、書いて表現することを連関させる一体的な活動であり、読解力と書く力をはじめ、様々な資質・能力の育成が見込まれる。また、他者の視点に立ち、想像力を働かせて書くことを通して、思いやり共感する感性等の情意的側面が醸成されていくことが期待される学習であることが見出された。

③国語科の授業における ICT の効果的な活用について

協働学習においては、拡散から収束、共有という一連の流れを迅速に行えること、そして、回収と配信を瞬時に行えるという利点を生かすことの必要性を見出し、その活動を授業実践に組み込んだ。また、個別学習においては、書くことの学習に活用する指導法を検討した。とりわけ、文章創作の最中にタブレットを活用して教師による支援を行うこと、そして、学習者同士が互いの文章を見合い、交流しながら記述ができるようにするという手立てを考案した。

(2) 実践研究

理論研究を踏まえた授業を構想し実践した。ここでは、都内公立中学校第2学年99名を対象に、「字のない葉書」（向田邦子）という戦争教材を取り扱い、視点を変えてリライトするという学習活動を中心的な課題として設定した。戦争の渦中にいる人々の心情を想像して書くという活動を通じて、情意的側面を涵養することを目指したからである。「字のない葉書」の中でも、普段は「暴君」である父親が、疎開先から衰弱して戻ってきた妹を抱きしめ涙するシーンは心を揺さぶられるところであるが、まず、このシーンを父親の視点でリライトする学習活動を行った。さらに、昨今の社会情勢を踏まえ、ウクライナの戦争関連の新聞記事を取り上げ、その記事に登場する人物の視点から文章をリライトするという学習活動を最終課題として設定した。

また、書く力を育むために、作家の技法を文章創作に活用することを加え、向田邦子の文章の魅力を学習者自身に抽出させ、それを創作に活かすべく、「ウクラ

イナ関連の新聞記事を向田邦子風にリライトする」という課題とした。

〈分析結果について〉

①リライト創作における情意的側面の表出について

2回に渡り実施したリライト創作の文章における、情意的表出について、文章に顕在化した認知的な側面を手掛かりに分析を行った。評価観点及び結果は、表1及び表2のとおりである。1回目のリライトでは、評価A・Bを合わせた89%の学習者に表出が見られた。これは、あらかじめ時間をかけ、協働学習を行いながら、父親の人物像について分析的に読み込み、理解を深めることができていたということと、文章が短く人物の心情を想起しやすかったということ等が要因として挙げられる。一方、2回目のリライトでは、学習者の情意的表出は71%となった。これは、「向田邦子風に」書くということが難点になったと考えられる。また、1回目のリライトよりも文章が長く、読解が困難であったということ、そして、文章を分析的に読み込む時間がなかったことにより、人物理解が乏しくなってしまうことが原因として挙げられる。

表1「父親視点のリライト」に見られる情意的側面の表出について

	観 点	人数	割合
A	高次の情意的側面の表出が見られる。 文中の人物への深い共感性を持ち、リライトした文章において高次の情意的側面の表出が見られる。言葉の見方・考え方を働かせながら、原文にはない心情表現を多数用いて、心情を豊かに表現している。	26人	27%
B	情意的側面の表出が見られる。 文中の人物への共感性を持ち、リライトした文章において情意的側面の表出が見られる。言葉の見方・考え方を働かせながら、原文にはない心情表現を用いて、心情を表現している。	47人	50%
	文中の人物への共感性を持ち、心情表現は見られるが妥当性に欠ける部分があったり書き換えるという技法的な側面に偏りが見られたりする。	11人	12%
C	情意的側面の表出は見られない。 文中の人物への共感性がなく、リライトした文章において情意的側面の表出は見られない。原文の視点を書き換えただけで、心情表現が見られない。	10人	11%

表2「ウクライナ記事リライト」に見られる情意的側面の表出について

	観 点	人数	割合
A	高次の情意的側面の表出が見られる。 文中の人物への深い共感性を持ち、リライトした文章において高次の情意的側面の表出が見られる。言葉の見方・考え方を働かせながら、原文にはない心情表現を多数用いて、心情を豊かに表現している。	11人	11%
B	情意的側面の表出が見られる。 文中の人物への共感性を持ち、リライトした文章において情意的側面の表出が見られる。言葉の見方・考え方を働かせながら、原文にはない心情表現を用いて、心情を表現している。	20人	20%
	文中の人物への共感性を持ち、心情表現は見られるが妥当性に欠ける部分があったり書き換えるという技法的な側面に偏りが見られたりする。	39人	40%
C	情意的側面の表出は見られない。 文中の人物への共感性がなく、リライトした文章において情意的側面の表出は見られない。原文の視点を書き換えただけで、心情表現が見られない。	29人	29%

②文章創作における作家の技法の活用について

学習者が抽出した向田邦子の文章の特色をどの程度使用したのか、そして、それぞれの項目を正しく使用できていたかということについて分析を行った(表3)。構成面においては、「現在—過去—現在」という展開にすることや、伏線を敷くことなどは多くの学習者が巧みに活用できており、文章創作を後押しする一助となったと言える。また、表現面では、6項目のうち4項目は正答率が90%を越え、「字のない葉書」の学習で得

た学びを活用できていたといえる。短い一文を多く用いるといった特色は多くの学習者が活用し、工夫して文章を書くための一助としていた。一方で、比喩や対比といった表現技法の活用については課題が見られた。

表3 向田邦子の特色 使用状況

類 番	項 目	使用者	正答者	正答率
構成面	① 現在—過去—現在という展開になっている	46人	45人	97.8%
	② 前半の内容が後半の伏線となっている	42人	37人	88.1%
	③ 前半と後半で心情の描き方が異なっている 前半：具体的・直接的 後半：抽象的・間接的	13人	9人	69.2%
	④ 書き出しが端的に述べられている	42人	41人	97.6%
	⑤ 比喩表現を用いていること 直喩・擬人法	25人	13人	52.0%
	⑥ 向田さん独特のちよと難しい言葉を用いている	23人	21人	91.3%
表現面	⑦ 人物をイメージできる的確に表現する言葉を用いている	33人	33人	100%
	⑧ 推量を表す表現(～だろう)を用いている	25人	23人	92.0%
	⑨ 対比的な表現を用いている	11人	8人	72.7%
	⑩ 文体 短い一文を多く用いている	50人	50人	100%
	⑪ 辺りの様子を描写・情景描写を用いる	25人	17人	68.0%

4 研究の考察

視点を変えるリライト創作においては、文章を分析的に読み込み、人物理解を深めることが肝要であり、それらが情意的表出にも影響するということが分析を通じて顕在化した。協働学習等を通じて多角的な視点から人物分析を行ったり、スモールステップでの文章創作活動を行ったりすることが必要であると推察される。他方、学習者の意識調査結果においては、リライト創作を経て、ウクライナの人々の心情を考えられたという者が84.9%、ウクライナの問題を自分事として考えるようになった者が81.8%見られ、情意的側面の涵養を目指すべく構想した授業実践の有用性が示されたともいえる。視点を変えてリライトするという学習活動が、情意的側面を涵養するための有効な手立ての一つとなり得るといえる。また、学習者自身が抽出した作家の技法を活用することが、文章創作の後押しとなることが明らかになった。教材で習得したことが活用され、学びが関連していったという点においては、学習活動の意義があったといえる。ただ、比喩や対比といった表現技法の適切な使用について課題が浮き彫りとなった。文章創作を支える継続的な語彙力の育成が肝要である。

5 今後の展望

本研究の汎用性という点において、小説や説明文といった他のジャンルの文章にも応用できるのかということについては検証の余地がある。また、情意的側面については、長期的な視点を持って育成や検証を行う必要があるため、他学年で想定されている教材や学習活動においても検証していかななくてはならない。多面的な側面から、多様な言語活動を通じて情意を涵養していくことのできる工夫を凝らした授業デザインを今後も検討していきたい。